

オリゲネスにおけるエステル記理解

—古代キリスト教における反ユダヤ主義をめぐる—

久山道彦

1 教父における「反ユダヤ主義」

教父と云われる古代キリスト教の思想家達は、ユダヤ教徒をどのような人々である
と見做し、ユダヤ教に対して如何なる態度をとっていたのであろうか。新約聖書に記
されているイエスこそユダヤの預言者が指し示していたメシアであると信じ、そのこ
とを「論理的に」確証しようとした教父達は、律法と預言者の文書を經典として共有
しながらも、イエスをメシアと認めずメシアの来臨を待ちつづけているユダヤ教に対
して、何を根拠に自らの真理性を主張したのであろうか。また、彼らは如何にその共
通の「文書」を読み、解釈し、共通の基盤に立って対論したのであろうか。更に、彼
らの主張の内に後代のアンチ・セミティズムの起源が在るとするならば、教父達はイ
エスの伝えた福音を正しく理解したといえるのであろうか。

このような問いに答えることは、キリスト教がその母胎であるユダヤ教から独自の
宗教として成立し、それを思想的に展開していく過程を考察する上で、またキリスト
教が正典としての旧新約聖書を一貫して解釈する「原理」を考える際にも看過しえな
い点である。更に、20世紀前半に「アウシュヴィッツ」を経験したユダヤ教とキリ
スト教の双方にとり、この問題は常に考察し続けるべき根本的な課題であると言え
よう。小論では、2世紀から3世紀にかけて活躍した教父オリゲネスの著作において、
従来あまり顧慮されなかった旧約聖書中ユダヤ教的色彩の強いエステル記の引用に焦
点をあて、この問題を考える端緒を探ってみたい。

まず、教父における反ユダヤ主義の問題に関する戦後の研究の動向を、主として英
米圏を中心に瞥見しておきたい。第二次世界大戦直後の研究は現実の歴史的経験を色
濃く反映し、キリスト教会はその宗教的アンチ・セミティズムの故に究極的にはホロ
コーストに責任があるとする主張がなされた¹⁾。キリスト教会がユダヤ教に挑んだ教

理的な論争における「神学的反ユダヤ主義」こそ、新約文書に端を発するアンチ・セミティズムの起源であるとするものである²⁾。かかる主張は現在でも強い影響力を持ち、ユダヤ人迫害に手を貸したその起源を教父達の著作の中に見る R. Ruether³⁾の研究はその典型であると言えよう。従って、膨大な教父文献の中から多くの反ユダヤ主義的あるいはアンチ・セミティズムと思われる個所を探し出し、その一覧表を作成して批判する研究は従来も行われてきたし、今日でもなされつつある⁴⁾。

しかし、一方で、伝統的な立場から教父達を擁護する反論もなくなかった。更には、アンチ・セミティズムの起源はキリスト教ではなくして、排他的なユダヤ教によって引き起こされたのであり、ユダヤ教独自の宗教儀式や慣習を認めない異教社会の中に既にキリスト教以前から在ったという主張もなされた⁵⁾。だが、これらの研究は総じてキリスト教著作家以外の中にアンチ・セミティズムの起源を見出そうとしたために、結果的にはユダヤ教にその責任を負わせてしまったのであった⁶⁾。

だが、このように激しい議論がなされる以前から、宗教的見解の相違を論駁する反ユダヤ主義 (Anti-Judaism) の伝統と、後代の政治的に人種差別を意図するアンチ・セミティズム (Anti-Semitism) とを簡単に同一視することへの学問的反省がなされていた。起源 135 年から 425 年までのローマ帝国内のキリスト教とユダヤ教の関係について、宗教的・政治的状況や正統と異端諸派の対立、そして、折衝と同化の問題を詳細に検討した M. Simon⁷⁾がその代表的研究である。

その後、キリスト教側から『ユダヤ教徒駁論 Adversus Judaeos』文献を、単にアンチ・セミティズムの起源を見出す資料とするのではなく、それらが執筆された歴史的状况をより丁寧に分析する研究がなされ⁸⁾、ユダヤ教の側からも同様の試みがなされるに至り⁹⁾、アンティオケアやアレクサンドリアなど、各地域において特徴的なユダヤ教とキリスト教との論争の具体的状況が明らかにされるようになった。加えて、初期ラビ文献の詳細な研究により¹⁰⁾、ローマ帝国の公認宗教であるユダヤ教側から少数派であったキリスト教への批判、ユダヤ教に改宗させるための伝道、そのための鋭く挑発的なキリスト教批判も知られるようになった。

現在では、キリスト教内に起源をもつ反ユダヤ主義乃至アンチ・セミティズムと、キリスト教外に起源を持つ反ユダヤ主義乃至アンチ・セミティズムの区別がなされ、そもそもユダヤ教の特質の内に、それと向かい合う宗教・思想・社会の中にユダヤ教に対する態度決定を基準として分裂が生じてきたことが明らかにされている¹¹⁾。

また、ユダヤ教とキリスト教間の論争のレトリックを分析し、「対立の理論」を手がかりに、教父達が論争の対象にしたのは「象徴的ユダヤ教」であり、彼らの真意はキリスト教のアイデンティティを神学的に確立することであったとする M. S. Taylor¹²⁾の研究も、Simon の研究を発展させたものであり、キリスト教の成立史に関わる重要な視点を提供している。それにより、古代における駁論の枠組みの認識が明確になり、キリスト教対ユダヤ教、対グノーシス、対プラトニズム、対ストア哲学などに加え、またそれぞれが別の論争相手に対して用いる複雑な「駁論の構造」を理解することが研究者にとって要求されるようになった。

では、教父における「反ユダヤ主義」は、如何なる形態をとり、どのような主張をしたのであろうか。L. M. McDonald¹³⁾によれば、それは、文学的には、「対話 (dialogues)」、「立証 (testimonies)」、「講話 (homilies)」という三つのジャンルをとると言う。どの場合も多くの旧約聖書引用、特に預言者達からの引用で溢れている。だが、これらの典拠が示しているのは二つの明確な主題、つまり、第1点としてイエスは神のメシアであるということ、第2点としてイスラエルは頑なにもそのことを認めないというものである。

そのことから、「対話」においては、ユダヤ教徒をキリスト教徒に改宗させようという意図が明確にされる。ユスティノスとトリュフォンの対話はその典型である。この改宗を目指した対話は現実にはあまり実を結ばず、むしろユダヤ教と接触したキリスト教の側に、イエスがメシアであることを共通の経典である「旧約聖書」に基づいて確証する必要、つまり、聖書解釈に対する洞察を深めさせることになった。

次に、「立証」は、ユダヤ教徒に対してイエスがメシアであることを証明しようとした論争のジャンルであり、最も一般的なものであった。テルトゥリアヌス¹⁴⁾やキプリアヌス¹⁵⁾に見られるように、キリスト教側は、ユダヤ教徒が神の律法を守らなかったが故に神から見放され、今やキリスト教徒こそが神の民、真のイスラエルになったと主張するのである。

そして、「講話」においては、アフラハト¹⁶⁾、クリュソストモス、そしてシリアのエフラエム等に見られるように、最も強い調子でユダヤ教徒に対する非難が行われる。最早、ユダヤ教徒をキリスト教に改宗させようとする意図は後退し、彼らの頑なな信仰は非難の対象となり、ユダヤ教徒達は救われる可能性がない人々、救い主イエスを殺した者達とされてしまうのである。

このように、教父達の「反ユダヤ主義的」文書において、強調されているのは、以下の諸点である。(1) ユダヤ教徒はイエスがメシアであることを認識できなかった、(2) それは、彼らが頑なであり聖書から真理を読み取れなかったからである、(3) それ故、彼らの宗教的儀式を拒否した神により彼らは断罪され見捨てられる、(4) 従って新しい神の民であるキリスト教会によって取って代われ、(5) その結果、ユダヤ教徒達が理解できなかった聖書はキリスト教徒のものとなり、キリスト教徒のみが聖書を正しく解釈できるのである。

このような「論法」により、教父達は、自らが確信したキリスト教の使信をユダヤ教に対して論理化していった。しかし、そこには、イエスが最も嫌った「自らを義とする」態度が含まれていなかったのではあろうか。この「論法」による自己正当化の聖書解釈に問題はないのであろうか。

2 エステル記の特徴と評価

ここで、旧約聖書中、極めてユダヤ教的とも言えるエステル記を取り上げ、この文書の特徴と評価を瞥見しておきたい。

エステル記の特徴としては、まずなによりも他の旧約諸文書と異なる「非宗教的」とも言える雰囲気挙げられる。しばしば指摘されるように、ヘブル語テキストのエステル記では、神の名が一度たりとも現れず、ユダヤ人がその困難な時に神に祈ってもいない¹⁷⁾。もちろん、セプトゥアギンタ（以下、LXX と記す）のギリシア語テキストには、モルデカイとエステルの祈りが含まれているため宗教的色彩が強くなり、カトリックの伝統では尊重された。しかし、ユダヤ教徒にとってはプリム祭の起源譚であっても、神も祈りもないユダヤ民族主義の強い文書がキリスト教徒にとって如何なる意味を持つかは、ヘブル語テキストのみを認めたプロテスタントの伝統においては注解者を悩ませることになり、正典としての価値を認めない立場も現れてしまったのである。

C. A. Moore¹⁸⁾ がその注解書の冒頭で述べているように、エステル記の正典としての評価は必ずしもキリスト教史上一定していない。周知のごとく、エステル記は死海文書に見出されない唯一の旧約文書であり、フィロンが言及していないのに、モーゼス・マイモニデスのような優れたユダヤ教学者はエステル記を高く評価するが、宗教改革者マルチン・ルターは、「私はあの書物（マカバイ記二）とエステル記には敵意

を抱いている。それゆえ、それらは全く無いほうが良いと思う。」¹⁹⁾と極めて否定的な評価を下しているのである。加えてエステル記8章11節がアンチ・セミティズムに悪用された問題がある²⁰⁾。小論ではエステル記の注解史²¹⁾について述べないが、学問的なエステル記注解は、キリスト教の側では他の旧約諸文書に比べて決して多いとは言えず、現代においても意欲的な注解書が書かれているものの、なおエステル記評価が揺れている点に注意しておきたい²²⁾。

ならば、教父達のエステル記解釈も再検討を要するのではないか。従来のようにエステル記を正典として扱っているか否かにとどまらず、何を議論をする際に、どのようにエステル記を引用し、エステル記の如何なる特徴から学んでいるのかが問題となろう。それにより、キリスト教とユダヤ教が折衝していた時期に、テキストにも翻訳にも問題の多いエステル記が如何に読み解かれていたかが闡明されるであろう。

3 オリゲネスにおけるエステル記理解

以下、オリゲネスの諸著作のエステル記引用を見ていくが、それによりオリゲネスがこの文書から学んだことを自らの体系的思索に位置付け、後代の「アンチ・セミティズム」とは異なった解釈を提示していることを理解したい。

3-1『原理論』におけるエステル記

オリゲネスは『原理論』の第3巻1章において自由意志について論じた後、2章において、人を罪へと駆り立てる逆らう霊 (contrariae virtutes) について述べている。オリゲネスは、善いあるいは悪いことに関するある種の記憶が、神の摂理ないし逆らう霊どもによって引き起こされる場合を取り上げる際に、「善なる霊の示唆によって、人間の記憶に善なることが呼び覚まされる」²³⁾例として、エステル記に言及している。「このことは、エステルの書に示されている通りである。即ち、アルタクセルクセス王は義人モルデカイの功労を忘れていた。そこで夜の眠りを神により妨げられて疲れきった王は、出来事の記録の書を持ってくるように命じることを思い起こした。その書の中に書かれたモルデカイの功労によって心を動かされて、彼はその敵ハマンを木に掛けるよう命じ、モルデカイにはすぐれた栄誉を与え、危機に直面していた聖なる者たちの民全体を救ったのである。」²⁴⁾先にも指摘した通り、ヘブル語テキストには「神」という語はなく、「その夜、王は眠ることができなかつたので」となっている。

オリゲネスは LXX の「いっぽう主は、その夜、王から眠りを遠ざけた」を元に、「神により (a deo)」と表現している。オリゲネスが、ヘブル語テキストを熟知しているながら、LXX を持ち出しているのは、果たしてテキストを無視した恣意的な、不正確な翻訳に基づく折衷的解釈なのであろうか。彼自身は、その問題に自覚的であったのだろうか。この点に関しては、後述したい。

オリゲネスの聖書解釈に親しんだ読者なら、このような解釈の根底に彼の自由意志論があることに気づく。悪と罪の原因は神ではなく、「善あるいは悪に向かうように我々の心に注ぎ込まれた良い思いや悪い思いによって、どちらかに向かわせる動揺および刺激が引き起こされるに過ぎない」²⁵⁾ からであり、我々が自由なる決断をする能力を有していることに由来するという彼の自由意志論に基づいている。つまり人間本性それ自体は、「逆らう霊」に対して戦いを挑む力を持っておらず、「人間本性には一定の限界がある」ことについてのオリゲネスの根本的人間観がある。オリゲネスのエステル記引用も、そのような神学的コンテクストにおいて用いられているのである。「神からの助けに頼らなければ、恐らく、人間が自らの力だけでは逆らう霊に決して打ち勝つことはできないと私は思う」²⁶⁾ と続けて彼が述べる場合、そこで考えられているのは、次に見るような、現実に猛威を奮う悪の勢力の問題であった²⁷⁾。

3-2 『ヨハネによる福音書注解』におけるエステル記

オリゲネスは、『ヨハネによる福音書注解』の第 2 巻 13 章において、悪の実在性について考察している。それは、「すべてのものはロゴスを通して作られた」(Jn 1:3) ならば、悪も、罪もロゴスを通して作られたのかという問題に直面するからである。オリゲネスは、「悪は元^{はじめ}から存在したのではないし、永遠まで存在するものではない」²⁸⁾ とし、それを「無 (οὐδέν)」、「存在しないもの (οὐκ ὄν)」と呼び、パウロに倣って (Rm 4:17)、悪を「非存在 (μη ὄντα)」としている²⁹⁾。その際に、「セプトゥアギンタによるエステル記では」と断わった上で、「モルデカイはイスラエルの敵を『非存在』と呼んで、『主よ、あなたのしゃくを非存在 (μη οὐσιν) [無に等しい者] に与えないでください』(Es 4:C-22) と述べている」³⁰⁾ と言う。もちろん、これはオリゲネスの記憶違いで、モルデカイではなくエステルの祈りの中にある言葉である。しかし、ここでオリゲネスが悪を「非存在」としていることに注意しておきたい。「在りて在る者」と自らを啓示する「存在する者」、つまり善にして義なる神に対立す

る概念としてこの「非存在」を用いていることが重要であり、悪の表象として用いられる「悪霊」も「逆らう霊」も、この意味において等しく「非存在」にすぎない。しかし「非存在」としての虚でありながら我々人間に対して現実に猛威を奮う悪こそ、信仰の根幹を揺るがし無化しようとする力なのである。従って、『ヨハネによる福音書注解』において自覚的に LXX のエステル記を引用することにより、オリゲネスは悪をめぐる彼の思索をはっきりと示しているのである。

3-3『ローマの信徒への手紙注解』におけるエステル記

さて、オリゲネスは、『ローマの信徒への手紙注解』の第1部第4巻5章において、ローマの信徒への手紙4章16-17節に注解をする際に、神からの無償の賜物としての「恵み」について論じている。我々が神を信じていると認める信仰そのものが、恵みの賜物によって我々の内に強固なものとなることを述べ、その例として、「神の御前で恵みを見出した」ノア、モーセ、「その主人の前で恵みを見出した」ヨセフに続けて、「エステルは、彼女を見たすべての人々の間で恵み (*χάρις*) を見出していた」(Es 2:15)、そして、「エステルは他のすべての乙女にまさって恵み (*χάρις*) を見出し、王はエステルに王妃の冠を授けた」(Es 2:17) を引用する³¹⁾。この箇所は、12章3-5節を注解している第2部第9巻2章においても、先のヨセフの例と共に引用されている。オリゲネスはパウロが神から与えられた恵みによって語っていることを述べ、「神の教会を教える人々には、その言葉の内に恵みが宿っているだけではなく、生涯を通してなされる殆どすべての行為においても同様であるのがわかるであろう」³²⁾と言う。「恵みによって語られる言葉」には、教えの権威や力とは別の力があり、博識からでた言葉が如何に優れ、巧みに構成されていようとも、恵みによって語られたり書かれたものでなければ、読者を喜ばせることはできても、完成の域にまで導くことはできないとも言う。従って、オリゲネスによれば、「パウロは、彼自身が恵みによって語ることを語っているのみならず、自分の話を聞く人々にも恵み与えられるように、それも一つの恵みではなく、多くの恵み与えられるようにと祈っているのである。」³³⁾ここには、『原理論』第3巻におけるオリゲネスの自由意志論に見られる、善にして義なる神への信仰と、その信仰における人間の有限性の自覚が看取される。神を信じているという人間の信仰も、実は神の恵みの賜物であり、神の言葉の内に宿る恵みが、それを信じる者の行為の内にも宿り、それを聴く人々の心の内に

も宿るよう祈りという行為をなさしめる³⁴⁾。オリゲネスが、エステルという言葉と行いは神から与えられた恵みの賜物であることに着目し、「祈り」に言及しつつ信の構造を論じている点に注意しておきたい。

3-4 『祈禱論』におけるエステル記

上述した『ヨハネによる福音書注解』でも『ローマの信徒への手紙注解』でも、エステル記の引用は、LXX のテキストに基づき、「祈り」と関連していた。従って、オリゲネスが『祈禱論』の13章で、イエスが祈りを重んじ、祈りが聞き入れられた多くの例を聖書から挙げる際に、ハンナとヒゼキヤの祈りに続いて、「イスラエルの民が滅亡の危機に瀕した時、断食を伴ったモルデカイとエステルの祈りは聞き入れられた」³⁵⁾として、エステル記に言及しているのも極めて納得がいく。しかも、その結果として、マカバイ記二(15:36)にある「モルデカイの日」に言及し、イスラエルの民にとり喜びの日であるプリム祭の起源であることを述べているのであるから、彼がLXXのテキストを念頭において引用していることは間違いない。

この点は、次のことから明らかである。続く14章で、オリゲネスは、テモテへの手紙一に基づいて、祈りを「願い(δέησις)」、「禱り(προσευχή)」、「執り成し(ἐντευξις)」、「感謝(εὐχαριστία)」に四分類するが、その「願い」の例として、ザカリアとモーセの祈りの次に挙げられるのが、モルデカイとエステルの祈りである。オリゲネスは、ここで、二人の祈りを含むLXXから、「モルデカイは、主のすべてのわざを思い出して、主に願って(ἐδεήθη)言った、『主よ、万物を支配される王である主よ』」(Es C-1)と祈ったこと、そしてエステル自身も「イスラエルの神なる主に願って(ἐδείτρο)言った、『主よ、わたしどもの王である主よ』」(Es C-14)と祈っていることを挙げている³⁶⁾。

注意すべきは、この後で、聞き入れられる祈りを聖書の霊的な解釈とオリゲネスが結び付けている点である。「細心の注意を払って探究される神秘的な解釈から導き出される事柄は、禱っている者らに、文字に従ってもたらされると思われる慈しみよりもはるかに勝っているからである」と述べ、「魂が不毛であったり不妊であったりすることないように努力する」のは、「わたしたち(の祈り)が、ハンナやヒゼキヤのように聞き入れられるためであり、モルデカイやエステルやユディトのように、敵対して陰謀を企む悪霊どもから救いだされるためである」³⁷⁾としている。ここでは、具

体的な人物としてのハマンの陰謀と言うよりも、むしろ、我々の魂に挑んでくる悪霊からの救出が述べられている。この点は、16章でも、地上的で物質的な恵みに勝る霊的恵みを述べる際に、ハンナやヒゼキヤと同様に、「エステルとモルデカイと（イスラエルの）民は、ハマント（彼に）唆された者らの（陰謀）以上に、精神に関わる陰謀から救い出されたのである」³⁸⁾として、特定の歴史的状況からの具体的な救出のみならず、個々の魂にとっての危機から救済されたと解していることから明確である。従って、『祈禱論』においては、祈りの例として、LXX からエステル記の引用がなされ、聖書解釈と結び付けられて魂の救済に関わるコンテキストに置かれている。

3-5『殉教の勧め』におけるエステル記

では、オリゲネスが『原理論』、『ヨハネによる福音書注解』、そして『祈禱論』において、「悪霊」や「逆らう霊」の働きとしてその現実的脅威を人々に説いているのは、何を意味しているのだろうか。それは、オリゲネスが『殉教の勧め』において、遠い昔の偶像崇拜ではなく、彼の時代に起こっている偶像崇拜の強要を意識し、棄教か殉教かの選択が迫られていることを述べる際に、エステル記に言及し、LXX から引用していることからはっきりと理解される。「それは、今も、ハマんにモルデカイなるわたしたちが彼を伏し拝むことを欲させないためである。あなたたちは言わねばならない、『わたしは神の栄光の上に人の栄光を置きはしない』（Es 4:C-7）と」³⁹⁾。ここでは、クセルクセス王の命にもかかわらず、権力者ハマンの前に跪くことをしなかったモルデカイの態度（Es 3:2）に倣い、ローマ帝国下のキリスト教迫害という、「悪霊たち」が偶像崇拜を強要している当時の状況を重ね合わせて、自らも偶像崇拜をしない殉教の覚悟を述べているのである⁴⁰⁾。言うまでもなく、偶像崇拜こそ人間の有限性への越権行為の最たるものだからである。

3-6『アフリカヌスへの書簡』におけるエステル記

最後に、『アフリカヌスへの書簡』を見ておきたい。この手紙では、当時教会の中で正典として用いられていたダニエル書（続編）中のスザンナの物語に疑問を持ったアフリカヌスに、オリゲネスが答えている。ユダヤ人が用いているヘブル語テキストと、当時流布しており、オリゲネス自身も収集し参照している幾つかのギリシア語訳との齟齬について、彼が「あらゆる版の異読の意味を知ろうと懸命に努力し」⁴¹⁾、そ

れら一つ一つの問題に関して幾人ものパレスティナのユダヤ教徒と質疑応答していたことがはっきり記されている点で⁴²⁾、加えて、議論が分かれるテキストについて、オリゲネスがどのように解釈しているかを知ることができる点でもこれは重要な文献である。

この書簡で、オリゲネスはヘブル語テキストよりもギリシア語訳の方が多い場合と少ない場合が多く個所に見られることを認めた上で⁴³⁾、幾つかの具体例を挙げている。その最初にくるのがエステル記である。彼は、「読者を教化するのに相応しいモルデカイの祈り（続編 C. 1-10）もエステル記の祈り（続編 C. 14-30）もヘブル語テキストの中には見られない。また、ハマーンが（アルタクセルクセス王の権威をもって）命じたユダヤ民族を根絶することに関する勅書（続編 B. 1-7）も、モルデカイが同様にアルタクセルクセス王の名によって書いた、ユダヤ民族を救い出すための勅書（続編 E. 1-8:13）も見られない。」⁴⁴⁾と明解に述べている。

従って、これまでのオリゲネスによるエステル記引用においても明らかのように、彼はエステル書のヘブル語テキストと様々な翻訳の違いに自覚的であったし、その翻訳の引き起こす事態も充分認識していたのである。それにもかかわらず、LXX の内容をその齟齬の故に価値なしとせず、むしろ翻訳の違いに解釈を深める契機があることを認め、積極的に評価していることがわかる。エステル記のようなテキスト上の問題が多い文書に対するオリゲネスの学問的態度は、彼の聖書解釈の根本をよく示している。

4 結 論

以上、小論では、古代キリスト教における反ユダヤ主義の相貌を解明する端緒を掴みたいという問題意識から、旧約聖書の中で最も非宗教的でユダヤ主義的色彩が濃厚であり、ユダヤ教においてさえ正典として問題視され、ヘブル語原文のみならず翻訳上の問題から後のアンチ・セミティズムにも利用され、正典としての評価がキリスト教史上揺れつづけたエステル記を、オリゲネスの著作全般にわたり彼の解釈を考察した。

オリゲネスにおけるエステル記理解から学び得ることは以下の点であると考える。

1. テキスト本文への探求と吟味におけるユダヤ教との共同作業の重要性

本文に異なる読みが存在し、様々な異なる翻訳の可能性があり、実際に人々がそれ

らを読み、そこにキリスト教的使信を見出そうとする上で、聖書テキストの真意を読み解くために必要とされる地味な文献学的努力、つまり、「本文において」ユダヤ教徒と学び合うことにこそ、キリスト教思想の学問としての在り方の基礎があることをオリゲネスは示す。

『アフリカヌスへの書簡』に顕著なように、オリゲネスは、ユダヤ教徒と対論する場合に、彼らのテキストについて無知であってはならないこと⁴⁵⁾、ヘブル語テキストとギリシア語テキストの違いや、アクィラ、テオドテオン、LXX等の翻訳の相違⁴⁶⁾、語源的説明⁴⁷⁾など、「言葉に細心の注意を払い」⁴⁸⁾つつ「敬虔に」探究する⁴⁹⁾ことの重要性を説いている。それは、まさにオリゲネス自身が、その聖書解釈において実践していたことであった。

2. 自由意志論や悪の問題という重要な神学的コンテクストにおけるエステル記

オリゲネスは、テキストと翻訳に困難を持つユダヤ教的色彩の強いエステル記を、反ユダヤ主義の「論法」に用いるのではなく、むしろ自らの神学的思惟の中で普遍的問題に関わる仕方を読み解いている。『原理論』では自由意志論と連関させ、人間本性の有限性を自覚しつつ神からの働きかけを確信し、『ヨハネによる福音書注解』では非存在でありながら仮現的に猛威を奮う悪の様相を捉え、『ローマの信徒への手紙注解』では、神からの恵みにより魂の救済の可能性を示し、また『祈禱論』では「祈り」を通して霊的なものへ向かう聖書解釈を示し、更には、『殉教の勧め』では「聖書を生きる」者として、偶像崇拜か殉教かの決断について述べている。

オリゲネスは、決して「比喩的解釈」によってユダヤ教の伝統を無化し、キリスト教化しようとしているのではない。既に学んだように、オリゲネスはエステル記を反ユダヤ主義的「論法」に利用してはいないのである。オリゲネスは一貫した神学的コンテクストにおいて、単なるユダヤ民族の祭儀起源譚以上のもの、人間の存在の全体に関わる悪の問題と魂の救済の可能性を読み解いているのである。

オリゲネスの著作全般に引用されているエステル記から、彼のエステル記理解を学ぶことにより、従来ギリシア哲学との関連を中心に研究されてきたオリゲネスの思想も、パレスチナのユダヤ教の聖書解釈とも対話した聖書解釈の側面から再検討する重要性が理解される。それにより、キリスト教の成立と発展の歴史を、ヘレニズム・ユダヤ教とユダヤ的キリスト教の連関を過小評価して叙述する誤り⁵⁰⁾から解放され、古代におけるヘブライズムおよびヘレニズム思潮との思想連関を解明する手がかりが与

えられ、ユダヤ教とキリスト教双方にある偏見を、その根源から再考する道が拓かれるように思えるからである。

注

- 1) J. Parkes, *Judaism and Christianity* (1948), p. 139, p. 167.
- 2) L. Poliakov, *The History of Anti-Semitism* (1962, trans. by R. Howard, 1965).
- 3) R. Ruether, *Faith and Fratricide: The Theological Roots of Anti-Semitism* (1974), pp. 223-225.
- 4) S. G. Wilson (ed.), *Anti-Judaism in Early Christianity* (1986).
- 5) R. Wilde, *Treatment of the Jews in the Greek Christian Writers of the First Three Centuries* (1949); B. Lazare, *Anti-Semitism: Its History and Causes* (1903).
- 6) J. N. Sevenster, *The Roots of Pagan Anti-Semitism in the Ancient World* (1975).
- 7) M. Simon, *Verus Israel* (1948, Eng. Trans. 1986), pp. 395-400, esp. p. 397.
- 8) R. L. Wilken, *Judaism and the Early Christian Mind* (1971), pp. 9-31, *Jews and Christianity in Antioch in the First Four Centuries of the Common Era* (1978), p. 95.
- 9) B. Pearson, *Christians and Jews in First-century Alexandria* (1986), p. 216.
- 10) H. Maccoby, *Early Rabbinic Writings* (1998).
- 11) W. Klassen, *Anti-Judaism in Early Christianity: The State of the Question* (1986); J. G. Gager, *The Origins of Anti-Semitism: Attitudes Toward Judaism in Pagan and Christian Antiquity* (1983).
- 12) M. S. Taylor, *Anti-Judaism and Early Christian Identity: A Critique of the Scholarly Consensus* (1995).
- 13) L. M. McDonald, "Anti-Judaism in the Early Church Fathers", pp. 215-252, ed. by C. A. Evans & D. A. Hagner, in *Anti-Semitism and Early Christianity* (1993).
- 14) Tertullianus, *Adversus Judaeos* 13.
- 15) Cyprianus, *The Lord's Prayer* in Treatise 10.
- 16) Aphrahat, *Homilies* 12. 7; 17. 1; 21. 1-7.
- 17) 例えば, D. Goldstein, *Jewish Legends* (1996) 参照.
- 18) C. A. Moore, *The Anchor Bible: Esther* (1971), pp. xxi-xxxiv.
- 19) M. Luther, *Tischreden* 24. 原典主義によりヘブル語テキストから翻訳をしたルターのエステル記理解は、彼のユダヤ教観を考える場合に極めて興味深い。
- 20) 勝村弘也訳, 『旧約聖書Ⅷ』, 岩波書店 (1998年) のエステル記 8:11 の注及び,

吉田泰「旧約聖書と『アンチ・ユダイスムス』」,『明治学院論叢』584 (1996年)を参照。

- 21) エステル記の注解史を知る上で簡潔に叙述してあるのは, L. B. Paton, *The Book of Esther* (International Critical Commentary; Edinburgh, T. & T. Clark, 1908), pp. 97-118 であろう。
- 22) 上述の Paton は、「この書物には何一つ気高い特徴はない。…道徳的には、エステル記は旧約聖書の一般的な水準を、いや外典の水準をさえ、はるかに下回っているのである」と述べている。“The Book of Esther”, p. 96 を参照。
- 23) Origen, *De Principiis*, 3, 3, 4.
- 24) Origen, *De Principiis*, 3, 2, 4.
- 25) Origen, *De Principiis*, 3, 2, 4.
- 26) Origen, *De Principiis*, 3, 2, 5.
- 27) 自由なる意志決定力と悪についてのオリゲネスの理解に関しては、拙論「オリゲネス『原理論』に於ける悪の問題序論」,『基督教学研究』第10号 (1988年) 127-143 頁を参照。
- 28) Origen, *Commentarii in Iohannem*, 2. 13. 93.
- 29) Cf. Origen, *Commentarii in Iohannem*, 2. 13. 94.
- 30) Origen, *Commentarii in Iohannem*, 2. 13. 95.
- 31) Cf. Origen, *Commentarium in Epistolam S. Pauli ad Romanos*, 1. 4. 5.
- 32) Origen, *Commentarium in Epistolam S. Pauli ad Romanos*, 2. 9. 2.
- 33) Origen, *Commentarium in Epistolam S. Pauli ad Romanos*, 2. 9. 2.
- 34) オリゲネスにおける祈禱については、『有賀鐵太郎著作集』第1巻,『オリゲネス研究』, 創文社 (1981年) に収められている「祈禱の問題」, 40-119 頁を参照。
- 35) Origen, *De Oratione*, 13. 2.
- 36) Cf. Origen, *De Oratione*, 14. 3.
- 37) Origen, *De Oratione*, 13. 4.
- 38) Origen, *De Oratione*, 16. 3.
- 39) Origen, *Exhortatio ad Martyrium*, 33.
- 40) オリゲネスの偶像崇拜に対する態度については、有賀『オリゲネス研究』の「殉教者の道」, 121-158 頁の、特にプロスキュネイン (προσκυνεῖν) とラトレウエイン (λατρεύειν) に関して論じている 128-131 頁を参照。
- 41) Origen, *Epistola ad Africanum*, 5.
- 42) Cf. Origen, *Epistola ad Africanum*, 5-8.
- 43) Cf. Origen, *Epistola ad Africanum*, 3.
- 44) Origen, *Epistola ad Africanum*, 3.
- 45) Cf. Origen, *Epistola ad Africanum*, 5.

- 46) Cf. Origen, *Epistola ad Africanum*, 2.
- 47) Cf. Origen, *Epistola ad Africanum*, 12.
- 48) Origen, *Epistola ad Africanum*, 10.
- 49) Origen, *Epistola ad Africanum*, 11. オリゲネスにおける「敬虔なる探究」については、拙論 “The Searching Spirit: The Hermeneutical Principle in the Preface of Origen’s *Commentary on the Gospel of John*”, *ORIGENIANA SEXTA* (1995), pp. 433-439 を参照。
- 50) Cf. M. Simon, “Verus Israel”, x.